

I 貝類毒化調査

佐々木 恵一・藤田 恒雄

目 的

本県沿岸域のアサリ、ホッキガイ、ムラサキイガイにおける、毒化状況と貝毒原因プランクトンの出現状況を定期的に調べ、貝類毒化対策と貝類毒化予知手法の開発に役立てる。

なお詳細については平成 13 年度赤潮貝毒監視事業報告として刊行しているので、ここでは概要のみを示す。

方 法

(1) 貝類毒化状況調査

アサリ、ムラサキイガイ、ホッキガイの麻痺性貝毒と下痢性貝毒を検査した。

アサリは松川浦の川口前で採取したものを4～9月および3月にかけて、ムラサキイガイは4～9月および3月に小名浜港で、ホッキガイは5月～8月にかけて請戸沖で採取したものを検体とした。

(2) 貝毒原因プランクトン出現状況調査

各地点とも採水した1ℓの海水中の *Alexandrium* spp. と *Dinophysis* spp. の個体数を計数した。松川浦湾口部では平成 13 年 3 月～9 月にかけて、小名浜港では平成 13 年 4 月～9 月および平成 14 年 3 月、鶴ノ尾埼沖合定線は4月～9月にかけて採水を行い貝毒原因プランクトンの計数を行った。

結 果

(1) 貝類毒化状況調査

アサリ、ムラサキイガイ、ホッキガイとも年間を通して貝毒は検出されなかった。

(2) 貝毒原因プランクトン出現状況調査

松川浦湾口部では、下痢性貝毒の原因である *Dinophysis* 属のプランクトン、麻痺性貝毒の原因プランクトンである *Alexandrium* 属とも通年確認されなかった。

小名浜港内では4月2日、5月7日に採取したサンプルから、それぞれ *Alexandrium* 属のプランクトン 40 個体/ℓを確認した。*Dinophysis* 属は確認されなかった。

鶴ノ尾埼のサンプルからは *Alexandrium* 属が4月に最高で 80 個体/ℓの発生を確認した。5月にも 20 個体/ℓ確認出来たサンプルがあった。その後は全く見られず、期間を通して全体的に少ない。*Dinophysis* 属は9月までの調査期間を通して見られたが、全体的に発生数量は少なく、最も多かったサンプルでも 120 個体/ℓであった。